4

わが国の近世初期の医療についての一考察　一、古写本　鍼灸秘書

○戸田　静男・亀　節子

「鍼灸秘書」は、著者不明である。これは、本邦近世初期（一七世紀初め頃）の作で、五臓観図を有し中世解剖図として重要な逸品とされている。この図には、三百六十の経穴を取り上げているとの記述がある。しかし、実際には九十一穴しか記載されていない。人体図には、それらの経穴が図示されている。これは、従来の十四経の経穴が三百六十穴であることによる数字合わせから来るものであろう。この書でこのように少数の経穴しか取り上げていないのは、最も有効な経穴が選択されたことによると思われる。

人体図は前面一葉、後面一葉、側面左右各一葉からなっている。前面では、取穴目標となる肋骨が記載されている。後面では、脊椎が記載されており、背部兪穴に相当する経穴の取穴目標となっている。しかし、解剖図にしては、各経穴の具体的な取穴法は一部書かれているだけである。経穴は一般的には経絡上にあり、必ず所属経絡を有するとされている。しかし、この書物には経絡が一切記されていない。これは、経絡の概念を取り入れずにあくまでも経穴の臨床治療学であることを目的としているからであろう。

「こけつ」、「けんり」、「しんけつ」、「てんそう」、「けんせい」、「たいすい」、「たいりょう」、「きょくち」「たいえん」、「五里」、「三里」のようないわゆる十四経の経絡上の経穴名ばかりではなく、「しもしゃく」、「さいち」、「せんち」、「ちもん」、「ちうらく」、「さいち」、「せんち」、「さいきゃく」、「てんくわ」、「すうもん」のような十四経の経絡上にない経穴名も多く記載されている。しかし、これら十四経の経絡上にない経穴名であっても、経絡上の経穴の部位とほぼ似かよっているものも少なくない。

治療対象となる症状は、「せうかつ」、「かっけ」、「しわふき」、「ふしょく」、「やせやまい」、「せなかのひえ」、「みみなり」、「てのしびれ」「づふう」、「あしのあくそう」な

ど一般的なものであり全身的なものである。

この書物には、空、風、火、水、地といったインド医学の影響を受けた分類体系が見られ、従来の中国医学の他、仏教医学や民間医療の知識が散見される。治療に関しては、灸数と鍼の刺入寸度が書かれているが、治療方針を決める「証」については全く書かれていない。また、病因、病期のような概念はほとんど入っていない。

このようなことから、この書は鍼灸治療を行うための伝承的解剖書および治療解説書（現代でいうところのハンドブックのようなもの）もしくは切紙（現代でいうところのノートのようなもの）ではなかったのではないかと思われる。

同様の鍼灸医学書に「灸書」、「灸穴書」、「鍼法書」（いずれも写本で、安土桃山時代から江戸時代初期のものと推定されている）などがある。これらも、ほとんど経穴個々の治療学書（たとえば現代でいうと臨床薬理学書に相当する）といえるであろう。江戸時代初期以前の鍼灸医学書には、症状に対する有効穴が複数記載されているものが多い。それに対して、この時代においては経穴を中心にしてそれに応じた症状が記載されている文書が多く、従って当時は伝承的な経穴を重要視した治療学（症状からの治療学ではなく）が優勢であったと推察される。

以上のように、数多い経穴の中でも有効であるものを選択し、経穴個々の効能を伝承しようとしたところにこの書の意義があると思われる。

なお、字体から判別して、現写本は江戸中期以降に転写されたものと思われる。

（関西鍼灸短期大学）